

論文審査の結果の要旨

論文題目 流通論の展開 — 剰余の政治経済学
氏名 沖公祐

1 論文概要

本論文は、剰余の問題に関しては、社会的再生産を通じて形成される剰余価値としてはじめて考察することができるとしてきたマルクス経済学の通説を批判し、経済原論における流通論の段階から、市場の構造を解明する中心的な論点をなすと捉える、「剰余の政治経済学」を再構築することを課題としている。全体は「はじめに」3頁、本論80頁（1頁あたり44×40字）、および参考文献からなり（400字詰め原稿用紙ほぼ410枚に相当）、本論は4章で構成されている。その概要は以下のとおりである。

第1章「流通における剰余」では、剰余を伴う商品流通を基礎に、貨幣の理論を再構築することが課題とされている。この問題背景を明らかにするため、まず経済学説史を振り返るかたちで、剰余の概念が、なぜ、経済学の表舞台から消えてしまったのか、その経緯が紹介されている。

経済学が形成されていった黎明期、交換を引き起こす原動力はそもそも何か、という論点をめぐって、論争が繰り返されてきた。交換は奢侈から発生するとみる奢侈＝交換論と、交換は必要不可欠な物資を相互に取り替えるかたちで発生するとみる必要＝交換論との間に展開された奢侈論争である。しかし、この論争は、アダム・スミス以降、必要に基づく交換を中心に市場が捉えられるようになるにつれ後退・消滅してゆき、貨幣保有は一時的でリダントな要因として軽視する傾向が支配的になったという。こうした経緯を踏まえてみると、カール・マルクスの流通論は、流通における剰余、奢侈に基づく交換に再度注目したものと、より広い学説史的な文脈のなかで、その意義を理解することができるという。

このように捉え返すと、マルクスの最大の特徴は、現行版『資本論』で、貨幣の生成を説く価値形態論が、交換過程論から明確に分離されるようになった点に、特に鮮明に現れていることがわかる。交換過程論ではなお、 $W-W'$ という物々交換をひとまず想定し、その困難から $W-G-W'$ という間接交換が発生するとみなす、スミスの観点がなお払拭されていない。そのため、貨幣をもつばら交換のための用具としての位置づける面が、交換過程論のうちには残存しているというのである。

これに対して現行『資本論』では、商品の属性としての価値が他の商品の使用価値で表現されたものとして貨幣を位置づける価値形態の理論が、交換過程論から分離され、それに先行してまず展開されるかたちが定着する。物々交換では、商品に内属する価値を表現するという過程は考えられない。価値形態論における簡単な価値形態は、物々交換と見かけは似ているが、価値表現の有無という点に着目すると、根本的に異なることは明白となる。このマルクス固有の認識は、スミスの貨幣発生論が、事実上、剰余物の存在（肉屋がもつとされる「ほとんどの人が彼らの勤労の生産物と交換するのを拒否しないだろうと考えられるような、なんらかの特定の商品の一定量」）を媒介として、貨幣の必要性を導出しながら、貨幣の生成後にはこの媒介を消去して、彼本来の必要物どうしをお互いに交換するという商品流通の規定にもどってしまう欠陥を、理論構成のうえで克服する契機となっているというのである。

したがって、商品の売買の主要目的は、直接に必要な、つまり、欲求の対象となる、別の商品を手に入れることにあるのではなく、基本的に余剰物としての商品を売っておくことにある。物々交換の間に貨幣が便宜的な交換の用具として入ってきたという「分裂の論理」で貨幣を説明すると、この主要目的は見失われる。余剰物を商品流通の世界のなかで保持し続けるために交換はなされ、この目的に適した対象が選別されてゆく結果、商品体が余剰物の保持に優れた商品が、貨幣へと発展するという「展開の論理」が、『資本論』では分離可能となった。これにより、必要のための単純商品流通をこえた、余剰の価値表現と価値実現を含む商品流通像が明確になるというのである。

第2章「貨幣機能の二重構造 — 価値尺度と流通手段」では、マルクスの貨幣論のうち、価値尺度の規定と流通手段の規定との関係が究明される。貨幣を流通手段に一面化し、貨幣数量説的な方向に傾ききらいのある、古典派経済学の貨幣論を批判するかたちで、マルクスは貨幣の諸機能を重層的に捉える基本的枠組を明確にした。ただ、それでもなお、価値尺度と流通手段との関連には明確な整理が施されていないと問題点が指摘される。そして、この問題が、商品の価値形態と貨幣の価値尺度機能、価値尺度機能と流通手段機能という二つの関係を通じて究明される。

すなわち、まず、マルクスのテキストやそれをめぐる諸説を詳細に検討することを通じて、残された問題が、およそ次のように整理されて再提示される。価値形態論の課題は、ある商品の価値という性質を、他の商品の商品体で「表現」することにあり、すべての商品が有する価値としての性格を純粋に体现する一商品が貨幣として排除される。この貨幣は、その商品体の属性に還元できない有用性、貨幣としての機能から発生する形式的使用価値をもつ。その結果、貨幣には(1)商品体の属性としての有用性は不要であるが、(2)形式的使用価値を体现する商品体が要請されるというのである。

ここでのポイントは、価値形態論が交換のための等置ではなく、価値表現のための等置である点を明確に区別して捉えるべきだということにある。必要=交換論を意識的に排除しないと、この二重性が理論的に捉えられないというのである。この区別が明確になれば、貨幣に関して従来唱えられてきた、名目主義と金属主義との関係も次のように整理される。価値尺度としては、貨幣はその存在に関しては観念的だが、価値表現に適した素材性を求められるのに対して、流通手段としては、そのものがなければならないという意味で貨幣の実在性は必要となるが、代理物でよいという意味で、素材性は求められない、という対照的な二重性が明確に把握できるというのである。こうした整理をふまえてみると、従来高く評価されてきた宇野弘蔵の価値尺度論も、この二重性を無視して、価値尺度も流通手段も金属貨幣が素材として実在しなくてはならないというかたちに一元化する誤りを含み、その結果、紙券論の原理的把握を困難にする結果に終わっている。

本章では以上の整理と批判をふまえて、次のような二つの積極的見解が提示される。

第一は、「表現」と「代理」の分離論である。価値尺度としての貨幣は、商品の価値を貨幣素材で観念的に「表現」するのに対して、流通手段としての貨幣は、この貨幣素材を他の形態で「代理」というように整理し、表現と代理の概念がマルクスのテキストの吟味を通じて精密に規定されてゆく。

第二は、信頼の二重性論である。素材に対しては、そのものが純正かどうか、厳密にたしかめることに手数がかかり、そこに多かれ少なかれ「信頼」という契機が伏在する。このため、素材が純正たることを保証する表象が、純正な素材を代理するものとして授受される関係が発生する。これに対して、その素材自体が真に商品価値を代表しているかという点に関しても「信頼」の問題が発生する。貨幣素材の価値の大きさが、時空を通じて同一不変であるという保証はない以上、貨幣素材が有する価値の大きさに対する「信頼」は、市場における売買を通じて模索されるほかないと結論し、次の蓄蔵貨幣と資本の考察に移っている。

第3章「蓄蔵貨幣の形成と資本の運動」では、貨幣が商品経済のなかで資産としての独自性をもち、この資産性の展開のうちに資本の運動が発生する関係が明らかにされる。マルクスは、当初、市場の無政府性を明ら

かにするために、自己目的的に追求される蓄蔵貨幣、余剰としての貨幣の存在を強調していた。だが、古典派経済学の貨幣数量説批判に傾注するなかで、蓄蔵貨幣は必要流通手段量の調整のためのプールと見なされるようになる。その結果、蓄蔵貨幣の意義は、従属的・二次的な補足作用に後退する。

このような変更は、マルクス蓄蔵貨幣論が抱える限界を示す。というのは、商品経済の個別主体の観点から、資産としての貨幣の性格を捉えることを困難にするからである。余剰は基本的には、商品としてではなく、貨幣の形態で保有される。だが、貨幣滞留が許される市場では、商品価格に分散や変動が避けられない。その結果、余剰として貨幣を保有する主体は、転売による資産の収益性を追求するようになる。これが原初的な資本の運動である。商品も資産性を帯びるようになるのは、このような資本の運動のなかにおいてなのである。

マルクスの場合、以上のような展開は蓄蔵貨幣の補足作用的な理解への後退が禍し、商品経済的な資産の収益性追求を基礎とした資本概念は、充分展開されぬままに終わっている。こうして、資本の運動は、直接、生産過程に増殖の基礎をおく産業資本に転化せざるを得ないという結論へ一直線に進んでいる。マルクスの資本概念の限界はここにあるというのである。

第4章「労働力商品化の多型性」では、世代的な労働人口の「再生産」と、熟練の形成を中心に、剰余を形成する労働力商品が、同時に市場における売買に内部化されない性質をもつ点に注目し、労働市場が異なるパターンに分化する原理が解明される。余剰を内包する市場は、資産の収益性を求めて、資本という運動を生みだし、この運動は増殖の場を市場の外部に広がる生産過程に求めるようになる。そして、この外部への進出は単一のパターンに収斂するのではなく、多型化をもたらすというのである。

ここで再度、マルクスの理論形成の過程をふり返ってみると、当初、『経済学批判要綱』では、労働力商品の外部性が「非資本」として明確におさえられていたことがわかる。だが、この点をめぐっても蓄蔵貨幣の場合と似た展開がみられるという。古典派経済学と同じ労働価値説に基づきながら、同時に、それによって搾取の必然性を説くという意図が支配的になるなかで、『資本論』にいたると、労働力が「非所有」として、全面的に資本との関係で自己を維持するものに内部化されるかたちに変更される。このような変更は、マルクスの労働力商品化論の限界があるというのである。

このことは、古典派の人口法則論に対する批判・拒否と、マルクスの「再生産費」による労働力の価値規定との間に、新たな矛盾をもたらす。マルクスの場合、自然人口の増減とは独立に、資本主義的な人口法則は、産業予備軍の吸収・反発によって調整されると見なされている。産業予備軍の存在は、所得移転や用役給付（個人的消費のためのサービス労働）による収入の再分配、あるいは、資本－賃労働関係をとらない、外部の生産過程を前提とする。また、労働に多かれ少なかれ付随する熟練も、単純に労働過程の外部で、生産されるとはいえない。そのため、熟練の形成に関わる費用が、労働力の価値規定の要素となるかどうかは一概に決定できない。これらの労働力にまつわる外部性は、その処理をめぐってそれぞれに多型化を促すことになるというのである。

この多型性は端的には「労働市場」に現れるが、それを引きおこす根因は、「労働過程」に遡って掘りさげなくてはならない。合目的な活動という観点を中心に労働を捉えてみると、労働の本質には知的な活動が不可欠であり、そのため、身体的な活動と統合する熟練を多かれ少なかれ伴う。この熟練の構造を分析すると、(1)異なる作業を総合的に統括する面と、同じ作業における未知の要素を経験的に処理する面、(2)生産手段に対する熟練と他の労働者との協力関係の形成に関わる熟練という、直交する二つの軸で構成された熟練の構造があるという。

こうした熟練の構造をどう処理するかにより、労働市場も全面的熟練に依存した自立型労働市場になったり、一面的な熟練に立脚した相互依存型労働市場になったり、あるいは不熟練と従属型労働市場になったりすることになり、こうして多型化を遂げるのだと論じられている。余剰を追求する資本が、社会的再生産を取り

こむとき、労働力商品化を通じて、労働市場の多型性も不可避免的に派生する。こうして、余剰を含まない単純流通と、余剰を生み出す単一型の再生産過程（＝労働の単純化＋生活手段の全面的商品化）という、マルクスの二分法による資本主義像にかえ、余剰を内包する市場像を基礎に、労働市場の多型性を内包した資本主義像を再構築する必要があると結論されている。

2 評価

以上のような内容を有する本論文の積極的意義を述べれば、つぎのようになる。

第1に、商品流通に関する通説的な理解に対して、根本的に異なる立場を対置しようという試みがなされている。この分野は、すでに先行研究が長きにわたって大量に堆積しているが、これらを厳密に解説・解釈しながら、しかし、それをかなり大胆に批判・整理し、これとの対比において自説の意義を明らかにしている。いささか単純化が過ぎている嫌いも残るが、基本的には、通説を自説に都合のよいように歪める不適切な処理だとばかりは言い切れない。

第2に、理論構成の骨格が明確であることである。基本は、次の3点にある。(1) 市場を、必要物が相互に交換される場に還元するべきではなく、はじめから余剰物を含む交換の場として捉えるべきであるという。余剰を基底においた流通という命題である。(2) 余剰物を含む市場は、この余剰をさらに増殖しようという原理をその内部に具えている。これは、増殖の機会を求めて、市場交換の外部の世界、生産過程に進出する。流通と生産の二分論に対する、市場の浸透・包摂力という命題である。(3) 進出の前提条件となる労働力商品には、外部性がどこまでも残る。労働の生産物のように売買関係で処理できない労働力商品が、労働市場に多様なすがたを生み出す。外部の包摂が多型化をもたらす、という命題である。このような単純な3つの基本的命題によって、理論展開の骨組みは明確に構成されているのである。

第3に、理論内容だけではなく、その展開方法もまた、意識的に整理されている。基本的には、二項関係の組み合わせを特徴とする展開方法であるが、複数の関係を重層的に関連づけることで、現象の平面的な記述をこえた、理論的な分析が提示されている。欲求と欲望、奢侈と必要、ヒュームの奢侈＝交換論とロックの余剰＝交換論、価値形態と交換過程、分裂の論理と展開の論理、表現と代表、価値尺度の観念的素材性と流通手段の実在的非素材性、交換可能性と資産性、「非資本」としての労働力と「非所有」としての労働力、横の熟練と縦の熟練、生産手段に対する熟練と人に対する熟練、など、独自に対概念を駆使することで、全体として立体的な構造を組み上げようとしている。理論の展開内容はかなり複雑ではあるが、それを構成する展開方法は単純明快である。その点で、理論を構成する能力はかなり高いと評価できる。

第4に、スミスやマルクスの基本的なテキストを厳密に解釈し、そこに含まれる微妙な論理のズレ・不整合を摘出し、新たに解明すべき問題の所在を再発掘している。こうして、通説的解釈がテキストの一面を一般化したものであり、これに対して、別の理解のしかたが可能になる点を明らかにすることで、それ自体としては難解な問題の位置が既存の研究史を知る研究者に了解可能なものとされている。

たとえば、スミスの貨幣発生論はしばしばマルクスの貨幣生成論に連続するものであると解釈されてきた。しかし、価値形態論の交換過程からの分離・独立化という、マルクス自身が『資本論』の執筆過程で加えた改訂作業の意味を勘案すると、価値表現を根本とするマルクスの貨幣概念が、流通の用具というスミスの貨幣把握と、本質的に異質なものであることがわかる、といった解釈には、それなりの説得力がある。

また、当初、市場の無政府性を明らかにすべく、市場における剰余の存在を明確にし、また、労働力商品に関しても「非資本」というかたちで、その外部性を射程に収めていたマルクスが、『資本論』の完成過程で、なぜ、蓄蔵貨幣を流通手段に対して二次的な補完的存在とし、また、労働力を「非所有」として資本に完全に内

部化された存在に変えてしまったのか、という理由が、ブルードンらの市場社会主義論と古典派経済学との両面批判の結果として読み解かれている。こうした学説史的な検討をふまえたマルクスのテキスト理解が、余剰と外部性を強調する論文筆者自身の理論的主張と有機的に結合しており、学説史研究が単に過去の諸学説を整理することに終わらず、理論研究に効果的に生かされている。

いずれにせよ、複雑なテキストを通じて、諸説の配置全体を総合的に示す能力はかなり高いと評価される。また、内外の研究に対しても広く目が配られており、最近の研究動向を知るうえで益するところが少なくない。しかし、本論文には、疑問とすべき論点、さらに究明される未解決な課題も残されている。

第1に、用語・表現が独特でかなり難解であるという問題がある。筆者は、混同されやすい区別を明らかにするために、微妙な意味のズレを区別すべく、類似した用語を使い分ける方法を多用する。たとえば、「欲望」と「欲求」、「分裂」と「展開」、「観念性」と「実在性」、「代理」と「代表」などの区別は、厳密に定義しようとする記述はあるが、抽象的な区別だけに理解を促すための工夫がさらに必要であろう。こうした用語は、類似した使用例も先行しているので、そうした用語法を批判・精緻化するかたちで一般化を進める試みも併用されてよいと思われる。また、二分法に対応して、しばしば登場する「非所有」、「非資本」などの「非」という用語法も一般的であるとはいえず、表現上の改善が求められるところである。

第2に、テキスト解釈において、筆者自身の独自の主張をそこに読み込もうとする無理が散見される。たとえば、スミスの貨幣発生論のうちに、自分の消費を上まわる余剰部分の存在を読みとり、ここから余剰物どうしの交換が貨幣発生契機として想定されている、と進めた読解は、これもまた、一面的な解釈ではないかという疑問は払拭しがたい。

第3に、商品、貨幣、資本について考察した第1章から第3章までの理論領域と、第4章との関係が必ずしも明確に説明されているとはいえない。通説的な理論構成では、個別的な資本の発生と、社会的再生産過程を編成するいわゆる産業資本の間に、たとえば「流通論」と「生産論」というような、篇別上の区別、課題の転換を設けてきた。本論文の第4章は、内容上は労働組織やそこにおける熟練のあり方にまで踏みこんでいるが、これは従来、個別資本の理論的な解明をこえて、労働力の全面的な商品化を導入することで、はじめて明らかにされると考えられてきた問題である。従来の理論構成が適切かどうかはもちろん再検討されてよいが、第4章は、こうした全体的枠組みに関する十分な方法的再検討を欠いたまま、第3章の連続面に位置づけられているように読める。また、第4章の内容に関しても、熟練に偏したかたちで、労働力商品化の多型化が説かれている傾向が目につく。この点もまた、この章の理論的位置づけに関連して、疑問が残るところである。

第4に、本論文が資本主義経済の解明という基本課題に対してどのような意義をもつのか、現実との関連に結びつく理論的射程がなお不鮮明である。もちろん、現実の個別的現象を直接に論じる必要はないが、たとえば「余剰の政治経済学」という副題に含意された、資本主義の歴史的発展を捉える大枠がどう見なおされるのか、という点に対する論及がほとんど示されていない。既存の理論に対する批判や学説解釈の再解釈においては相当に精緻な検討がなされ、高度な展開が見られるが、それらは内向的で現実に対する含意が十分に伝わってこない。貨幣に対する多重的な信頼の分析や、熟練の二元性の分析など、いずれも現実の諸現象に対して、一定の含意を予想することは可能であるが、筆者自身は論及を控えている。序文なり、結語なりにおいて、本論文の意義として、理論の内的な精緻化が広い意味でどのような展望を開くのか、積極的に論じる余地がまだ多く残されている。

以上のような問題は残されているが、本論文は博士（経済学）の学位を授与するのに十分な研究成果を含むという点で審査員全員の評価は一致した。